

10月4日「神の富と知恵」ヨハネ福音書10：31～42

キリスト教にとって最も近い隣人と言えばユダヤ教です。仏教や神道と共通点を見出すことは難しいですが、ユダヤ教とは聖典（旧約聖書）を共有し、聖地エルサレムを共有しています。私たちがいつも守っている礼拝、つまり会堂に集まり、讃美を歌い、御言葉を聴き、祈り、食事を共にすること、これらはその母体となったユダヤ教から受け継いだものです。しかし、これほど近いにも関わらず、キリスト教とユダヤ教の関係はこれまで決して良好とは言えませんでした。特に両者の間を隔てている事柄が今日の聖書には書かれています。そうです、イエスを救い主キリストと受け入れるかどうか、です。

イエスがユダヤ教の神殿奉獻記念祭に出席しておられた時、周囲のユダヤ人たちがイエスを問い詰めました。「いつまで、わたしたちに気をもませるのか。もしメシアなら、はっきりそう言いなさい。」イエスは答えられました。「わたしは言ったが、あなたたちは信じない。わたしが父の名によって行う業が、わたしについて証しをしている。」多くのユダヤ人たちにとってこれは許し難いことでした。イエスが天の神に向かって「アッパ父よ」と親しく呼び掛けることは十戒の「主の名をみだりに唱えてはならない」に違反すると思えました。安息日に手の萎えた人を癒すことは「安息日を心に留め、これを聖別せよ」を犯す、神への冒瀆と映ったのでした。そして、最も許し難いことは、イエスが「神の子メシア」と自認していたことでした。それは十戒の第一戒「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」を犯すことだったのです。「善い業のことで、石で打ち殺すのではない。神を冒瀆したからだ。あなたは、人間なのに、自分を神としているからだ。」そう言って人々はイエスを拒否して、殺そうとしたのです。

イエスは石を持って向かってくる人々に向かって問われます。「わたしは、父が与えてくださった多くの善い業をあなたたちに示した。その中のどの業のために、石で打ち殺そうとするのか。」その言葉の通り、最初の教会の人たちがイエスを救い主だと信じたのはその数々の御業のためでした。イエスは天の父の名によって、多くの人々と食べ物を分かち合い、病

を癒し、悪霊を退け、嵐を鎮めました。そして最後には十字架の死から復活され、死と命さえも支配する力があることを示されたのです。そして同じくらい重要だったのはイエスの語った言葉に力があったことです。イエスの言葉は、隣人を愛し、神を愛するように教えるものでした。それは、預言者たちの言葉と同じくらい、いやそれ以上に神が近くにいると人々に感じさせるものでした。この方こそ救い主キリストだと最初の弟子たちは確信したのです。

今日の物語から分かることは、多くのユダヤ人たちにとってイエスの存在は信仰の根底が揺さぶられる出来事だったということです。最近、本で読んだ現代を生きる正統派ユダヤ人の言葉です。「神は唯一なり、以上！三頭政治はなし（父子聖霊の三位一体をもじっているとみられる）」結局、神殿に集まっていたユダヤ人たちはイエスを救い主キリストと信じることはありませんでした。それは、彼らの頭が固かったとか、心が狭かったとか、宗教的な権威を手放したくなかったとかだけの問題ではありません。彼らにとってはモーセの十戒に忠実であり続けるのか、それとも神がイエスを通して新しい言葉を語りなおしておられると信じるのか、重大な選択を迫られたのです。そして、多くのユダヤ人たちはモーセの十戒に留まることを選んだのです。この物語は神殿に集まったユダヤ人たちのことだけを描いているわけではありません。ヨハネ福音書はキリスト教がユダヤ人のシナゴグ（会堂）への出入りを禁じられたことを背景に書かれたと考えられています。

イエスの教えが、同胞のユダヤ人たちからは拒否された一方で、キリスト教会はローマ世界で受け入れられ、広まっていきます。そうです、福音はユダヤ人ではなく異邦人たちに受け入れられていったのです。ヨハネ福音書にもその葛藤が描かれていると思いますが、同じようにこの出来事と向き合った人がいました。パウロです。今日の日課ではパウロが書いたローマの信徒への手紙も選ばれています。それによると、彼は最初から異邦人伝道に積極的だったわけではなく、同胞のユダヤ人たちに何とかイエスの福音を伝えたいと願っていたようでした。けれども、彼の思いとは真逆

にイエスの福音はどんどん異邦人たちに広まっていきました。このことに葛藤し、頭を悩ませたパウロはこんな結論に行きつきました。「11:25~26 一部のイスラエル人がかたくなになつたのは、異邦人全体が救いに達するまでであり、こうして全イスラエルが救われるということです。」神さまは異邦人全体（すべての人）を救うために、あえて選ばれた民であったユダヤ人たちを不従順にしておられるのだ。けれども神の賜物と招きは取り消されることはない（29 節）。だから最終的にはユダヤ人も異邦人もすべての人が神の憐れみによって救われるんだ！（32 節）。私たち人間の目にはマイナスにしかならないと思えることであっても、神さまは必ず良い方向へと変えてくださるはずだ、そんな結論です。パウロはこの結論に至った後、今日の説教題の心境に至ったようです。「33 節 ああ、神の富と知恵と知識のなんと深いことか。だれが、神の定めを究め尽くし、神の道を理解し尽くせよう。」

先日、高齢の教会員で施設に入っておられる方のところに、手紙を持っていきました。ほんの数分しか面会は許されませんでした。泣いて喜んで「頑張ってリハビリしていると伝えて欲しい」と言われました。まだ一人暮らしを続けていた頃は、私が尋ねても一緒に祈ることさえ拒否された方が、今では毎日、自ら祈っているのだそうです。彼が教会の前で血だらけで倒れて助けを求められた時のことを思い出します。それから、行政の保護を受け、2割しか生き残る可能性はないと言われた手術を乗り越えて、現在に至ります。神さまは確かにこの方をその手に取り戻してくださいました。「ああ、神の富と知恵と知識のなんと深いことか」パウロの気持ちもわかる気がします。

私たちは今日、世界聖餐日を迎えています。しかし、コロナ禍にあつて、今日のように聖餐の行えない「世界聖餐日」はこれまであり得なかったでしょう。どう考えても私たちにとってこの出来事はマイナスでしかありません。けれども、私にとって確かなことは、聖餐が日常にある時よりはるかに聖餐式を大切に思っているということです。

先月の役員会で、教区からの要望もあり、10年後の教会財政はどうなっ

ているかについて話し合いました。悲観的な意見が多数みられました。高齢化も進む中で、コロナの打撃もあります。人間の目から見ればやはり今の状況はマイナスでしかないでしょう。しかし、その中で出た意見にこんなものもありました。「今こそ、教会の本来の働きに目を向けよう！」もし教会が順調であれば、こんなに教会の未来のことに思いを向けることはないでしょう。教会の本質とは何かを真剣に問い直す機会もなかったでしょう。

それぞれの事柄について簡単に答えを出すことは出来ません。けれども私が確信していることが一つだけあります。コロナ禍にあっても、高齢化の中にあっても、財政難の中にあっても神の祝福は変わらず私たちに注がれています。「33 節 ああ、神の富と知恵と知識のなんと深いことか。だが、神の定めを究め尽くし、神の道を理解し尽くせよう。」すべてが御手の中にあると信じて、神の富と知恵に委ねて信頼の中を歩んでいきたいと願います。